

— 原 著 —

保育専攻学生における動物との触れ合う経験が保育実践に与える影響
— その 2 —

川 村 高 弘

The Influence of Experiences in Coming in Contact with Animals for University
Students Majoring in Early Childhood Education in Childcare Practice II

Takahiro KAWAMURA

要 旨

幼児が身近な動植物と触れ合いやすい環境を整えていくことは、生き物をいたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを育むなど、子どもの成長・発達にとって大変重要である。幼児が身近な動植物と触れ合いやすい環境を積極的に作り出すためには、保育者自身が積極的に身近な動植物にかかわろうとする姿勢が必要である。しかし、保育者を目指す学生の中には、身近な動植物の中でも特に昆虫や小動物にかかわることが苦手な者も多く、そのことが保育を実践する上で自信の低下に繋がっていることが考えられる。

そこで、昆虫や小動物に着目し、昆虫や小動物に対する意識やそれらにかかわった幼少期の経験といった動物に対する経験・意識尺度の因子構造を明らかにするとともに、動物に対する経験・意識が将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかわっていくことができるかどうかといった保育実践への自信とどのような関係にあるのかについて検討を行った。

因子分析の結果、「昆虫肯定感」、「小動物肯定感」、「園における体験」の3因子を見出した。また、動物に対する経験・意識尺度と重回帰分析の結果、第1因子の「昆虫肯定感」と第2因子「小動物肯定感」とが「保育実践への自信」に有意な影響を及ぼしていた。しかし、第3因子「園における体験」に関しては、「保育実践への自信」に対する有意な影響は見られなかった。

キーワード：保育者、保育専攻学生、環境、昆虫、動物

I. 問題と目的

幼稚園や保育所等で行われる保育は、環境を通して行う保育が基本であり、幼児が生活の中で身近な動植物と触れ合うことができる環境を作り出すことは、子どもの成長・発達にとって大変貴重である。幼児の動植物とかわる経験の重要性について、幼稚園教育要領（2008）では「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」、また、保育所保育指針（2008）では「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」などと明記されている。

る。

幼児が身近な動植物と触れ合いやすい環境を積極的に整えていくためには、動植物に触れる機会を多く取り入れることが大切である。また、保育者自身が積極的に身近な動植物の世話をしながら、生きている物をいたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを子どもたちに伝えていくことが重要である。しかし、保育者や保育者を目指す学生の中には、身近な動植物の中でも特に昆虫などにかかわることに抵抗を感じる者も多い（山下・首藤，2004；栗原・野尻，2008）。

保育専攻学生における動物との触れ合う経験が保育実践に与える影響について調査した先行研究（川村ら，2015）では、保育専攻学生の動物との触れ合う経験や動物に対する意識（動物に対する経験・意識）が、子どもに身につけてほしい力（「探究心」，「公共心」，「思いやりの気持ち」）や、将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかかわっていくことができるといった保育実践への自信とどのような関係があるのかについて検討を行っている。その結果、動物に対する経験・意識尺度の因子分析により、「昆虫肯定感」，「動物への主体的なかかわり」，「小動物肯定感」の3因子が抽出された。次に、動物に対する経験・意識尺度の「動物への主体的なかかわり」から、育てたい力の「探究心」，「公共心」，「思いやりの気持ち」に影響を及ぼしていることがわかった。さらに、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「昆虫肯定感」が、「保育実践への自信」に影響を及ぼしていることが示された。しかしながら、調査対象が、一つの大学に限られているということと学生数（92名）を考慮しても十分な対象者を確保したとは言いがたい。

そこで、本研究では、調査対象について、大学数及び学生数を増やした上で、再度、動物に対する経験・意識尺度の因子構造を明らかにするとともに、動物に対する経験・意識尺度が将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかかわっていくことができるかどうかといった保育実践への自信とどのような関係にあるのかについて、明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者と調査時期

2014年7月～10月、関西圏の保育者を目指す大学生（K短期大学の学生110名，S大学の学生63名，H大学の学生25名）を対象に質問紙調査を実施した（回収率100％）。

2. 調査方法

講義時間の一部を用い担当教員により調査票を配布し、集合調査法で実施、回収した。本調査は、無記名とし、参加について学生の同意・了承を得た上で実施した。

3. 調査内容と質問項目

調査内容は、下記に示す通り、川村ら（2015）が学生を対象に作成した、昆虫や小動物に対する意識や過去の環境や経験を問う「動物に対する経験・意識」尺度及び保育実践への自信を問う項目を用いた。

(1) 動物に対する経験・意識

幼少の頃、保育園や保育所及び家庭において昆虫や小動物とどのような触れ合いをしていたのか、また、過去及び現在において、昆虫や小動物に対する意識について測定する尺度として下記の11項目を用いた。

- ①私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ②私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ③私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ④私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた
- ⑤私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした
- ⑥私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた
- ⑦私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした
- ⑧私は、幼い頃、昆虫が大好きであった
- ⑨私は、今も昆虫が大好きである
- ⑩私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった
- ⑪私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである

(2) 保育実践への自信

将来、動物にかかわる保育実践への自信があるかどうかについて、「私は、将来、保育者として子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかわっていくことができる」という項目を用いた。

いずれの尺度に対しても、「5. よくあてはまる」「4. 少しあてはまる」「3. どちらでもない」「2. あまりあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

統計処理には、統計ソフトウェア SPSS Statistics 19.0を使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 「動物に対する経験・意識」尺度の分析

表Ⅲ-1は、動物に対する経験・意識に関する尺度の質問項目と平均値（標準偏差）である。これらの尺度11項目を対象に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、3因子が得られた。表Ⅲ-2は因子分析の結果である。

各因子の信頼性を検証するために Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子は $\alpha = .836$ 、第2因子は $\alpha = .849$ 、第3因子は $\alpha = .762$ であり内的一貫性のあることが確かめられた。第1因子は、「私は幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある」「私は、幼い頃、昆虫が大好きであった」など、昆虫に対する肯定的なかかわりを示す項目の負荷量が高いため、「昆虫肯定感」と命名した。第2因子は、「私は、今も小動物（鳥・魚含む）が

表Ⅲ-1 保育専攻学生における動物に対する経験・意識に関する項目（標準偏差）

項 目	平均値 (SD)	
1 私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.86	1.212
2 私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.37	1.334
3 私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.23	1.240
4 私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	3.87	1.243
5 私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	3.41	1.190
6 私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	3.82	1.256
7 私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	3.06	1.271
8 私は、幼い頃、昆虫が大好きであった	3.10	1.344
9 私は、今も昆虫が大好きである	2.22	1.214
10 私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった	3.86	1.222
11 私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである	3.65	1.315

表Ⅲ-2 保育専攻学生における動物に対する経験・意識の因子分析

項 目	1 昆虫 肯定感	2 小動物 肯定感	3 園にお ける体験	共通性
1 私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.870	.074	-.179	.701
8 私は、幼い頃、昆虫が大好きであった	.805	.040	-.013	.674
2 私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.768	.035	-.023	.603
3 私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.681	-.161	.266	.582
9 私は、今も昆虫が大好きである	.415	.028	.080	.227
11 私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである	-.103	.868	-.009	.659
10 私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった	-.014	.813	.034	.673
4 私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	.118	.649	-.007	.517
5 私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	.145	.608	.072	.541
7 私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	.081	.021	.766	.670
6 私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	-.076	.050	.763	.560
固有値	4.541	1.054	.813	
累積寄与率	41.285	50.863	58.251	

大好きである」「私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった」など、小動物に対する肯定的なかかわりを示す項目の負荷量が高いため、「小動物肯定感」と命名した。第3因子は、「私の出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした」など園でのかかわりを示す項目の負荷量が高いため、「園における体験」と命名した。

2. 動物に対する経験・意識と保育実践力との関連

動物に対する経験・意識と保育実践力との関連を検討するため、「保育実践への自信」尺度を従属変数として、独立変数を「動物に対する経験・意識」尺度として重回帰解析を行った（表Ⅲ-3）。

その結果、第1因子の「昆虫肯定感」と第2因子「小動物肯定感」とが「保育実践への自信」に有意な影響を及ぼしていた。しかし、第3因子「園における体験」に関しては、「保育実践への自信」に対する有意な影響は見られなかった。これらのことから、昆虫や小動物に対する肯定的な意識が保育実践への自信の高まりに繋がると推察できることができると言えないということが明らかになった。

表Ⅲ-3 「保育実践への自信」
を従属変数とした重回帰分析

変数	標準編回帰係数	t値
昆虫肯定感	.310	4.17**
小動物肯定感	.320	4.40**
園における体験	-.024	-.352

* $p < .05$, ** $p < .01$,

IV. まとめと今後の課題

本研究では、幼少の頃、稚園や保育所及び家庭において昆虫や小動物とどのような触れ合いをしていたのか、また、過去及び現在において、昆虫や小動物に対する意識といった動物に対する経験・意識尺度が「昆虫肯定感」、「小動物肯定感」、「園における体験」の3因子で構成されていることが明らかになった。これは、川村ら（2015）の先行研究で抽出された「昆虫肯定感」、「動物への主体的なかかわり」、「小動物肯定感」の3因子とは異なる結果となった。

動物に対する経験・意識と保育実践への自信との関連を検討した重回帰解析の結果の第1因子「昆虫肯定感」と第2因子「小動物肯定感」とが「保育実践への自信」に有意な影響を及ぼしていたことから、昆虫や小動物に対する肯定的な意識の重要性が明らかになったとともに、昆虫に対し、苦手意識を克服するように努力することが、保育実践への自信の高まりに繋がることが示唆された。

また、第3因子「園における体験」から「保育実践への自信」に対する有意な影響は見られなかったことから、学生が幼少時から昆虫に対して苦手意識があり、現在では、更にその意識

が高まっている、あるいは幼少の頃に比べると現在は虫や小動物は苦手になってはいるが、保育者として現場に立てば虫や小動物に対する苦手意識は克服できるだろうという楽観的な展望を持っていることが推察される。しかしながら、実際には保育者になっても虫や小動物に対する苦手意識が克服されない場合も多いのではないだろうか。

これらのことから、保育者養成における授業やカリキュラムにおいて、どのような配慮・改善をすれば学生の段階から昆虫や動物と触れ合う経験を積み、それらを肯定的に捉えることができるのかについて検討していくことが今後の課題である。

引用文献

- 川村高弘・永井久美子 (2015). 保育専攻学生における動物と触れ合う経験が保育実践に与える影響. 神戸女子短期大学論叢, 60, pp. 1-7.
- 栗原泰子・野尻裕子 (2008). 保育者養成学生の動物との関わりについて—動物への対応と幼児への援助について—川村学園女子大学研究紀要第19巻第2号. pp. 27-38.
- 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- 山下久美・首藤敏元 (2004). 幼児への動物教材 (ムシ類) の提供についての研究. 埼玉大学教育学部教育実践センター紀要, 3, pp. 149-157.

参考文献

- 川村高弘 (2010). 保育専攻短期大学生のレジリエンスと保育者効力感の関係. 愛媛女子短期大学紀要, 22, pp. 17-24.
- 川村高弘・岡部康成 (2011). 保育専攻短期大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 浜松学院大学研究論集, 8, pp. 141-150.
- 川村高弘 (2012). 幼稚園教諭における自己教育力とレジリエンスおよび保育者効力感との関連. 修士論文 (愛媛大学大学院).
- 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響. 教育心理学研究, 50, pp. 283-290.
- 西村正子 (2000). 看護職者の生涯学習 年代別比較と自己教育力からの検討. 岐阜大学医療技術短期大学部紀要, 7 (1), pp. 45-55.
- 西山修 (2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究, 44 (2), pp. 150-160.
- 宮里智恵・川村高弘 (2013). 大学生の自己教育力と食育効力感の関連くらしき作陽大学研究紀要, 45 (2), pp. 43-52.
- 森敏昭・清水益治・石田潤 (2000). 大学生の自己教育力に関する発達の研究. 広島大学教育学部紀要, 第1部, 49, pp. 7-14.
- 森敏昭・石田潤・清水益治・富永美穂子 (2001). 大学生の自己教育力に影響する要因はなにか. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第1部, 50, 1-8. 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C. Hiew, C. C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, pp. 179-187.
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C. Hiew, C. C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, pp. 179-187.

文部科学省 (2002). 「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」 報告書.
山下久美・首藤敏元 (2009). 幼稚園・保育園での虫飼育実践の提案. 埼玉大学教育学部教育実践センター
紀要, 8, pp.159-168.

付記

1. 本研究は、日本保育学会第68回大会で口頭発表したデータを再分析し、論文としてまとめたものである。
2. 本研究を行うにあたり、ご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。